
銀河英雄年代史外伝 新たなる双壁

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄年代史外伝 新たなる双璧

【Nコード】

N6584I

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

新帝国領ジャムシード星域で宇宙海賊が港湾都市惑星ケルンを占領したとの報告が入る。

急派した帝国艦隊を壊滅させた宇宙海賊達は銀河革命戦線正統政府を名乗り、帝国に対し叛旗を翻す。一時静観を決め込んだ政府だったが、ケルン市民の混乱と暴動について鎮圧軍派遣を決定する。ハインリヒ・ランベルツ・ミッターマイヤーとロバート・ウェブスター帝国軍の誇る気鋭の提督達が宇宙海賊に挑む！

銀河英雄年代史外伝シリーズ 興奮の2作目!!!

この作品は、銀河英雄伝説の二次創作小説です。

第一話

新帝国歴20年4月21日、ジャムシード星域において、宇宙海賊と思われる艦隊約5,000隻あまりがジャムシード星域の惑星ケルンを占領したとの報告が帝国領内を駆け巡った。

事態を重く見た帝国軍首脳は直ちに、近くを哨戒中のイザーク・フェルディナンド・フォン・トゥルナイゼン大将の艦隊を派遣した。

トゥルナイゼン大将は先帝ラインハルト・フォン・ローエングラムとは同年でこの歳43歳にあたる。長らく閑職に追いやられていたが、先頃、艦隊司令官として復帰する事に成功した。

4月25日、トゥルナイゼン艦隊がジャムシード星域に到着した。

「静かすぎますな。まるで、攻めてくださいと言わんばかりです」

艦隊参謀長のティルピッツ少将が口を開いた。

「だが、星域に入らない事には情報がつかめん。哨戒艇を通常の倍の数を出して警戒を厳重にするように通達せよ」

トゥルナイゼンは若い時の失敗を繰り返すまいと、慎重な行軍を徹底させた。

4月26日23時、オペレーターの悲鳴が艦橋に響き渡った。

「艦隊後方より質量体多数接近！」

「なんだと……！ 各艦、艦隊密度を薄くし、質量体の接近を回避せよ！」

トウルナイゼンの命令が行き渡る前に、小惑星に簡易ブースターを取り付けた質量兵器の群れが艦隊に殺到し、陣形が側面から一気に突き崩された。さらに陣形が崩された隙をねらい、海賊艦隊が奇襲を仕掛けて来た。

「天頂方向より敵艦隊！ 数、およそ3000！」

「邀撃せよ！」

トウルナイゼンは陣形を再編し、海賊艦隊を迎撃しようとしたが、平和な時間が長かった帝国では、古参兵や実戦経験の豊富な将校が数多く退役し、秩序をもって抵抗できた艦はわずか1000隻に満たなかった。

海賊の戦術は巧妙そのものだった。スパルタニアンとワルキューレの混成部隊が大型艦の機関部を破壊し、小型艦の多い艦隊は岩礁に潜み、襲撃、撤退を繰り返し、たちまちのうちに帝国艦隊を行動不能にさせた。

そのさまは猛獣に追い立てられ、慌てふためく巨像の群れのようにであつたとトウルナイゼン艦隊の生存者は後世証言している。

「……してやられた！ ……全艦、退却……」

抵抗らしい抵抗が出来ず、歯噛みしながらトウルナイゼンは退却を指示したものの、ジャムシード星域から脱出できた艦は3000隻に満たず、残りの艦はことごとく捕獲、もしくは破壊された。

わずか一日の会戦で、トゥルナイゼン艦隊は戦力の8割を失ってしまっただった。

4月30日、ジャムシード星域第17番惑星ケルンで、ジェイムズ・アーロンを首班とする銀河革命戦線正統政府がローエングラム朝銀河帝国に対し独立を宣言した。

新帝国歴20年、銀河の歴史がまた一つ扉を開ける……

第二話

新帝国歴20年5月1日、皇帝アレクサンデル・ジークフリード・フォン・ローエングラム臨席のもと、御前会議が招集された。

会議に参加した帝国軍最高首脳は、摂政皇太后ヒルデガルド、国務尚書ウオルフガング・ミッターマイヤー、軍務尚書エルネスト・メックリンガー元帥、統帥本部総長ナイトハルト・ミュラー元帥、宇宙艦隊司令長官カール・エドワルド・バイエルライン元帥、帝国首相フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトであった。

まず最初に口を開いたのは、首相のビッテンフェルトであった。

「海賊風情に敗北したあげく、独立宣言をあげさせられるなど、トウルナイゼンは何をやっているか！これでは帝国の威信が丸つぶれではないか」

「いや、報告を聞く限りでは、トウルナイゼンに落ち度はない。彼は慎重な行軍に徹しているし、破れたのは軍の練度の低下と敵軍の戦術が組合わさった結果と言わざるを得まい」

ミッターマイヤーがビッテンフェルトを制しつつ、話を続けた。

「しかし、巧妙なものだな。質量兵器を使うやり口といい、艦艇を行動不能にするやり口といい、敵は老練なものだな」

「現在のところ、わかっているのは、ジェームズ・アーンという銀河革命戦線正統政府の首謀者のみです。我が軍のデータバンクに問い合わせましたが、過去100年にわたってその名前の人物は存

在しませんでした。現在、バーラト自治政府に問い合わせるところです」

メックリンガーが数少ない情報を報告すると同時に、バーラト自治政府のキャゼル又大将からのホットラインが入って来た。

キャゼル又は帝国軍首脳に一礼すると、現在知り得た情報のすべてを報告した。

「ジェイムズ・アーロンという将校は確かに実在しました。最終階級は少佐。巡航艦ラガシュの艦長をつとめています。ランテマリオ会戦時に未帰還、戦死扱いになっています。生きていれば、ちょうど60歳。我々の政府にも流れて来た独立宣言の放送の外見とも一致します」

ミユラーが口を開いた。

「何にしても、情報が少なすぎる。敵の戦力がどれほどかも、現在のケルンの市民がどの状態に置かれているかも、我々には何もわからないのですから」

皇太后ヒルデガルドがさらにつづける。

「これは純軍事的な問題だけではありません。銀河帝国のあり方自体も問われている問題でもあります。もし、銀河革命戦線正統政府を我々が容認すれば、第2、第3の銀河革命戦線正統政府が現れるでしょう。そうなれば、銀河唯一の政体である帝国の存在意義そのものが失われる結果にもなります。我々には、バーラト自治政府に自治権を許した前例があります。自治権を際限なく独立した星系にも与えなければならなくなるかもしれません」

「皇太后陛下。もとは自由惑星同盟の将校が起こしたことです。ケルンの内情を探るために捜査官の潜入をお許しただけませんか」

「お心遣い、ありがたくちょうだいいたします。キャゼルヌ大将。潜入に際しては、我々が全面的に協力する事をお約束いたします。

……それでよろしいでしょうか。皇帝陛下」

キャゼルヌの提案を受けたヒルダであったが、今回の議長は息子であるアレクサンデルであった。彼女は、この御前会議を最後に国政を息子のアレクサンデルに任せようと考えていた。

そのことはここに列席している一同が承知している事であったから、固唾をのんでプリンツ・アレクの皇帝として初の発言を見守った。

アレクサンデルは父から譲り受けた豪華な金髪を振り、皇帝として初の公式の命令を発した。

「キャゼルヌ大将の申し出ありがたくお受けしよう。帝国軍が全責任をもって潜入官を護衛する。銀河革命戦線正統政府の解釈についてはハイネセン大学のミンツ助教授の意見を聞き、ケルン市民に危害、ならびに何らかの犠牲がある場合、帝国艦隊は直ちに出兵、これを鎮圧するものとする」

後にメックリಂಗーはこの様を「威風堂々にして華麗、金髪のグリフォンがヴァルハラより舞い降りたかのようにであった」と述懐している。

歴史のページがまた一つ紡ぎ上げられる……

第三話

「……というわけだ。事態は一刻を争う。休暇のところ悪いが、ケルンの内情を探って来てくれ」

セラフィーナ・コ克蘭大佐はバート自治政府軍作戦部長バグダツシュ中將からケルン潜入の指令を受けとった。

これはセラフィーナがジャムシード星域からほど近いケリム星域で休暇中であり、時間的に速やかに潜入が可能だったからであった。

「了解しました。バグダツシュ中將、準備ができ次第、ケルンに向かいます」

「帝国軍の戦艦が護衛のためそっちに向かっているはずだ。すぐに合流するように。敵陣の中だ。けっして無茶はするな」

バグダツシュ中將は自分より遙か年少の部下をたしなめるように言った。

「は。肝に銘じておきます」

セラフィーナ・コ克蘭大佐はこの年、21歳。大佐にしては極めて年少の部類に入る。作戦参謀として優秀である事ながら、大小の武勲をたて、同世代に比肩しうるものがない自治政府軍の有望株である。

ヤン・ウェンリーが21歳で少佐であったから、旧同盟軍で言えば、大佐の最年少記録を塗り替えていた。

5月4日 ケリム星域5番惑星メリルに降り立ったセラフィーナは、すぐさま帝国戦艦「サターン」に移乗した。

「戦艦サターン艦長、ヴェルナー・テンシュテット大佐です。ケルンまで貴官を護衛いたします」

「よろしく願いいたします。テンシュテット大佐」

ヴェルナーはこの年の8月、海賊100隻を相手に巡航艦で単艦敵中突破を成功させており、作戦能力には申し分の無い艦長だった。もちろん、セラフィーナもこの事を知っていたため、ヴェルナーには道中の航行に全幅の信頼を寄せていた。

5月14日、サターンは敵の哨戒網をくぐり抜け、ケルンの岩礁宙域に到達する事に成功した。それはケルンまで目と鼻の先の地点であつた。

「申し訳ありません。コ克蘭大佐。我々ではここまでが精一杯です。あとの御武運を祈ります」

ヴェルナーはセラフィーナに敬礼した。

「いえ、ここまでこられたのはひとえに大佐たちのおかげです。どうして我々はここまで敵の哨戒網からくぐり抜けられたのでしょうか」

セラの問いは当たり前前の疑問であつたが、ヴェルナーはこともなげに答えた。

「銀河革命戦線正統政府がケルンを占領したのは、大規模な港湾施

設とドックがあつたからでしょう。彼らはおそらく自軍の船の整備を出来る場所を探していた。となれば、彼らの艦船の大部分はドックの中です。そして、トウルナイゼン艦隊とも交戦しているため、現在哨戒に動員出来る兵力は極わずかと思われます。だから、簡単にここまでする事が出来たのです」

「ありがとうございます大佐。大佐とは、またどこでお会い出来たらと思います」

セラはヴェルナーの洞察力に内心驚きながら、にこやかに微笑んで礼をいうとすぐに表情を変え軍人の顔になった。

「それでは言つて参ります。テンシュテット大佐たちもご無事で」

セラはそういうと直ちにシャトルを発進させた。

「うまくいくといいですな。艦長」

サターンを離れていくシャトルを眺めているヴェルナーに航海長のミハイル・ブラウン少佐が話しかけて来た。サターンがここまでたどり着けたのも綿密で繊細な彼の航路選択の故であつた。

「そうでなくては、俺や卿の頑張りが無駄になるからな。それに…あんなに若い娘が死ぬということも考えたくはないな」

ヴェルナーは自慢の眼鏡をかけ直しながら、傍らにいる航海長に言った。

「艦長も十分お若いじゃないですか。しかし、それにしても彼女、どこか副長に似ていましたね」

その名の通りの茶色髪の航海長は、本来この場にいるはずの副長の姿を思い出していた。

「そうだな。あの真つすぐな瞳はどこか彼女を思い出させる」

現在、副長のナオ・リヒテンシュタイン中佐は研修のため、帝都フエザーンの作戦部に出向していた。

やはり、傍らに副長がいないと落ち着かないものだ。彼女がいれば、もう少し楽に任務が遂行出来るのだが……ヴェルナーは一つ年長の副官がいない事を悔やんだ。

「私では女房役にはなれませんが、小姑くらいにはなれるよう努力しましょう。艦長」

年の割にはユーモアの無い台詞を吐いた航海長だったが、ヴェルナーは苦笑して言った。

「俺には小姑も女房もまだ必要ない。うるさくて昼寝もできやしないからな。……航海長、偵察衛星を出しておこう。少しでも本国に多くの情報を送るんだ」

こうして、ヴェルナーの配置した偵察衛星によって、帝国軍はケルンの周辺宙域の貴重なデータを得る事になるのだった。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第四話

惑星ケルンは人口約6000万人の港湾都市である。惑星の周囲は小惑星帯であるものの二つの回廊を有し、多くの輸送船、商船が行き来している物資の集積地であり、ジャムシード星域でも重要な戦略上の要地だった。

惑星ウルヴァシーには及ばぬものの、港湾施設、補給基地が整備され、小規模ながら、警備隊も駐屯していた。

ジェイムズ・アローンの指揮する海賊艦隊がまず行ったのは、港湾施設の制圧であった。自軍の艦船の整備修理のためにはドックが必要不可欠であったためである。

警備隊も、果敢に迎撃したものの数が違いすぎていた。警備艦隊500隻に対し、海賊艦隊約5000隻は明らかに荷が勝ちすぎる敵であったのだ。

帝都フェザーンに報告が届く頃には、すべての戦闘が終息に向かっていた。

次にアローンはケルンの行政中枢を制圧した。もはや警備隊は壊滅し、抵抗出来る勢力はわずかであったため、わずか一日にして惑星ケルンは海賊の手に落ちてしまった。

行政、軍事、それぞれの中枢を押さえたアローンは銀河政府、バート自治政府、そしてケルン市民に向けて銀河革命統一戦線正統政府の樹立と帝国からの独立を宣言したのであった。

当時、惑星ケルンに住んでいた市民の一人は次のような手記を残している。

「あつという間。あつという間だった。我々は何がおこったのかわからぬまま、帝国から独立するはめになったのだ」

実際の海賊に占領されたケルン市民は自分たちの置かれた立場に不安ととまどいの表情を浮かべながら、彼らの行動を見守るしかなかったのである。

占領に際しては、アーロンは自軍（海賊ではあるが）の兵士たちに略奪の禁止を厳命した。自分たちが侵略、占領したのは理解の上であつたし、市民の支持を得られるようにした方が統治に都合が良かったためである。

「意外だな。民衆が騒ぎだすかと思っていたが」

占拠した放送局の一室の窓から事件の首謀者は静かにつぶやいた。

「我々の行動があまりにも早かつたせいでしょう。自分たちの置かれた状況すらわかっていないように見えます」

側近のフ란ツ・ウィーデマンが言った。

年齢は30歳と若いが、沈着冷静で用兵に秀で、海賊艦隊の指揮官を務めていた。トゥルナイゼン艦隊を撃退したのは彼の戦術の賜物である。

「俺たちもやつと地に足の着いた生活が出来るって言う訳か。それにしてもあつけなさ過ぎてつまらんもんだぜ」

もう一人の側近のジークムント・ケストナーは言った。彼もまた、実戦部隊の指揮官であり、ウィーデマンとは対照的に攻撃的な性格で、その性格通りに攻撃的な用兵を得意とし、警備艦隊を一戦のもとに壊滅させたのは彼の功績であつた。彼もまた若く、年齢はウィーデマンと同じ30歳。二人ともアーロンが見いだし、育て上げた戦術家であつた。

ジェイムズ・アーロンの後半生はどの記録にも載っていない。後世の歴史家たちはアーロンについて「ローエングラム朝でもっとも謎とされる人物の一人」として彼の名前を挙げている。

記録に残っているジェイムズ・アーロンは宇宙歴758年惑星ハイネセンに生まれ、その後士官学校に入学、卒業後は宇宙艦隊勤務となり、第11艦隊に配属され、救国軍事会議のクーデターに参加。第11艦隊の敗北後は、第14艦隊に編入、ランテマリ才会戦にて未帰還、戦死扱いになっていた。

彼の部下からの証言を合わせた後世の資料によると、彼は会戦の混乱の最中、味方艦数隻を伴い同盟軍を脱走、その後は帝国領になっ

てしまった旧同盟辺境星域にて海賊行為を始めたとされている。ヤン・ウェンリーと同様、戦史の研究にも熱心でそれを自ら生きる道にことごとく応用していった。ゲリラ戦術を得意とし、神出鬼没に星域を暴れ回り、「幽霊艦隊」と帝国軍の星域警備隊を恐れさせた。

もともと、帝国軍にしてみれば、彼の正体を知る由もなかったのだが……

「さて……これからだな」

海賊の老提督は街を見下ろしながら静かに言った。

「はい……これからです……」

若き側近たちもこれからの帝国軍との戦いに思いを馳せ、静かに窓の外を眺めていた。

新帝国歴20年冬。新たな戦いの序曲が始まろうとしていた。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第五話

6月14日、セラフィーナが潜入して、一ヶ月が過ぎようとしていた。この一ヶ月間彼女がどこで、どのような諜報活動を行っていたかは記録に残っていない。一説には、現地にいた諜報員と行動をとるにたとされているが、それは説得力に欠けた推測としか言わざるを得ない。そうであるならば、自治政府や、帝国軍は犠牲や危険を払わずして、ケルンの情報を得られたからである。

セラフィーナから見たケルンの民衆たちは突然の占領による不安と狂躁から目覚めようとしていた。

唯一の方法しかとれないとは言え、アーロンのしいた統治は、軍事独裁であった。ケルンの全都市は戒厳令下に置かれ、物資の流通も統制された。

それは市民の安全をはかるものであったが、逆に生活の自由を奪われた市民はぶしつけな占領者に対して、じわりじわりと不満を抱いていた。

市民の姿を戒厳令下の中の窓越しに見たセラフィーナは、市民が爆発する時期が近いと悟った。

セラフィーナと、ヴェルナーの配置した偵察衛星からの情報は逐次、帝都フェザーンへもたらされていた。

6月25日、帝国では、第2回目の御前会議が開かれていた。

「それでは、銀河革命統一戦線正統政府を認めるべきではないとお

「つしやるのですか？」

アレクサンデルはFTLごしにユリアンにたずねた。

「はい。彼らの行っている行為は我々の理想とする民主共和制の理念とは全く異なるものです。個人の自由と権利を束縛する政治システムは我々の忌避するところです。また、帝国開闢以来20年経つたとはいえ、未だ帝国は安定の時期ではありません。この時期に他の国家の存在を許しては、帝国は瓦解するかもしれません」

「帝国立憲の父」と称されるまでになった亜麻色の髪青年は、20年を経ても変わらない純粋なまなざしで皇帝を見つめていた。

アレクサンデルは政治に関して母から手ほどきを受けているが、しばしば、FTLを介してユリアンからも民主共和制についての理念、戦史学を教わっている。これは皇帝たるもの、多様な考えを持たねばならないとのアレク自身の考えからであり、ユリアンもまた帝国国民のため努力を惜しまない少年皇帝に対し、自分が出来る範囲の助言を与えてきた。

「陛下。今回の一件は、国家の独立ではなく、我が帝国に対して海賊が起こした反乱にございます。反逆罪、騒乱罪にあたりますれば、討伐に足る理由がございます。ケルン市民に不要な犠牲を出さぬためにも、一刻も早く出兵をご決断くださいませ」

国務尚書のミッターマイヤーが言った。

「私もミッターマイヤー国務尚書の意見に賛同いたします。純軍事的に見ましても、出兵の時期が遅れば遅れるほど、彼らは艦船を整備し、十分な兵力で決戦を挑んでくるでしょう。そうなれば、我

が軍として犠牲は大きなものとなりました」

軍務尚書のメックリンガーも白髪に変わった長髪をゆらせ、頷いた。アレクは一瞬考えた後、ふと母の方を見た。17歳の皇帝である。決断に迷う事もあるだろう。摂政皇太后のヒルダは目を閉じ、ただ静かに頷いた。

「卿らの考え、よくわかった。予の決意も決まった。直ちに出兵の……」

そう言いかけたとき、軍務尚書付き秘書官のヘッセ准将がケルンからの緊急情報をもたらした。

「大変です。ケルンにおいて暴動が発生した模様です。暴徒化した市民に海賊が発砲したそうです」

御前会議に出席した全員が声を失っていた。ついに恐れていた、いや予想された事態が起きたのだった。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第六話

ケルンの暴動ははじめのうちは数百程度の小規模の市民の抗議活動に過ぎなかった。しかし、時間を経ることに参加した市民の数は幾何級数的にふくれあがり、15万人にまでふくれあがった。

アーロンも当初は発砲を固く禁じていたが、ついに発砲を許可せざるを得なくなった。ブラスターが幾筋もきらめき、その度に群衆が倒れていった。倒れた群衆を乗り越えて、更に多くの群衆が治安軍（むろん海賊ではあるが）の銃を奪い、すぐさま銃撃戦に発展した。アーロンは装甲車、大気圏内行動が出来るワルキューレを出し、ようやく事態を沈静化する事に成功したが、治安軍は1500名の死者と、その3倍の負傷者をだし、暴動に参加した市民のうち、8000人が犠牲になり、その5倍する人間が負傷したのだった。

報告を聞いて、誰よりもショックを受けたのは皇帝アレクであった。17歳になる若き皇帝は、ここにきて初めて、宇宙を背負う事への重圧に耐えかねているようだった。彼はその報告を聞いて立ち上がり、壊れんばかりのありったけの力で拳を机に叩き付けた。

無理も無い。まだ、17歳の若者に国家をゆだねるには早すぎたのだろう。ミッターマイヤーは息子の親友に声をかけようと席を立つとしたが、その若者のアイスブルーの瞳に宿った光を見たとき、静かに着席した。

わずか数瞬ののち、若き皇帝は静かに、だが明らかな怒気を持った声で臨席の首脳に命令を下した。

「ケルンの市民に犠牲者が出た事は予の誤りであった。……メックリンガー、ミュラー、バイエルライン。卿らに命じる。直ちに艦隊

を出しケルンを解放させよ。ミッターマイヤー。卿はバーラト自治政府のキャゼル又大将に連絡。揚陸艦隊警護のための艦隊派遣を要請せよ。ビッテンフェルトは議会に諮り、直ちにケルン解放のための予算を承認させるのだ。帝室予算もそのためなら削減しても良い。急げ」

温厚なアレクとは明らかに違っていた。覇気と鋭気に満ちた姿をしていた。居並ぶ首脳陣は戸惑いつつも直ちに勅命の実行に移った。後年、ミッターマイヤーはこの日の事を日記に書き残している。

「陛下は明らかに変わられた。息子の親友である優しいアレクサンデル・ジークフリードではなく、皇帝アレクサンデル・ジークフリードに。その覇気。その目の光は先帝、ラインハルト・フォン・ローエングラム陛下がヴァルハラよりお戻りになったかのようにであった。私は歴史が変わる瞬間にまたも居合わせる事になったのだ」

こうして、銀河帝国は出兵の準備に追われていく事になる。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第七話

御前会議が終了した後、アレクはフェリックスを自室に呼んだ。

フェリックスが入ると、そこには生気が抜けたようにうなだれたアレクが座っていた。

「アレク様……」

フェリックスは親友に声をかけた。

「フェル……俺は間違っていた。俺がすぐに奴らを銀河革命戦線正統政府などという賊どもを倒してさえいれば、こんな事にはならなかった。罪も無いケルン市民を俺が殺してしまったんだ……」

フェリックスの前では銀河帝国皇帝という殻をすぐに脱ぎ捨てる事が出来る。アレクは重臣たちに決して見せる事の無い弱々しい声でフェリックスに言った。

「アレク様……私は知っています。アレク様が誰よりもお優しい事を。そして誰よりもお父上を愛し、尊敬されている事も。お父上ならばきつとこういうでしょう。一つの失敗はまた一つ大きな成功でつぐなえばよいと……」

フェリックスは一つ年下の親友のために、静かに言った。

アレクはフェリックスを見つめ、目を閉じた。ようやく心休める事が出来たのだ。フェリックスはアレクに一礼すると部屋を辞した。

一方、艦隊出撃の勅命がおりた軍務省では、出兵の準備に追われて

いた。まず最初に決定されたのは、どの艦隊を派遣するかという事であった。これにはバイエルライン帝国軍宇宙艦隊司令官が副司令長官ドロイゼン上級大将とともに出撃する意思を示したが、軍務尚書メックリンガーと、統帥本部総長ミュラーが二人でとどめた。軍指導者自ら出兵したのでは、破れた場合帝国の威信を著しく損なうかもしれないこと、帝国に名将なしと後世に示す事にもなりかねないというのがその理由であった。

そこで、帝国軍三長官が出した結論はミッターマイヤー国務尚書の養子であるハインリヒ・ランベルツ・ミッターマイヤー中将、同盟出身の提督であるロバート・ウェブスター中将の両艦隊を派遣することであった。

ハインリヒ・ランベルツ・ミッターマイヤー中将はこの年32歳。高速、高機動の用兵には定評があり、「閃光ランベルツ」の異名を取る。その用兵家としての腕前は養父ミッターマイヤーをして「俺を超えたな」と言わしめるほどであった。

ロバート・ウェブスター中将もランベルツと同年でこの年32歳。旧自由惑星同盟出身者で初めて帝国軍士官学校を卒業した将校であった。そのため、人事には恵まれず、常に最前線にいたため、あるとき左目を負傷し、現在は義眼になっている。少壮気鋭ではあるが、若くして帝国軍の中でもっとも実戦経験のある提督の一人であった。

即日出撃命令が二人に出され、その命令を彼ら二人は「海鷲」で聞くことになる。一日の軍務が終わり、彼らはつかの間の戦士の休息を楽しんでいた。

「お前さんのとこの訓練は厳しいものだな。兵たちがいつか過重労働

働だと、組合でも作って労働者の権利をいいたしかねんぞ」

同盟なまりの帝国公用語で、ウェブスターは親友に毒を吐いていた。

「俺の艦隊は卿のように実戦経験はあまり豊富ではないんだ。だが、俺たちは誰よりも高い練度を誇りにしている。閃光ランベルツの雷名もこの訓練あつてのことだ。手も抜けん。しかし、明日からは長期休暇だ。部下たちも羽をのばせるさ」

ランベルツはごくまじめに返したが、戦士たちの休息を破るものが背後からやってくるとは気づかなかった。

「残念ですが、ランベルツ中将。その休暇は取りやめになりました。明日12:00をもって艦隊を出撃させ、ケルンの海賊どもを殲滅せよ。との皇帝陛下からの勅令が先ほど出されました。ウェブスター中将もです」

作戦部に研修中のナオ・リヒテンシュタイン中佐が休暇の取り消しと出撃命令を言いに行って来たのだ。

「リヒテンシュタイン中佐か。卿に紹介しておこう。作戦部から2ヶ月の予定で研修に来ているナオ・リヒテンシュタイン中佐だ。こちらはロバート・ウェブスター中将」

ランベルツが僚友にナオを紹介した。ナオも帝国屈指の名将に挨拶した。

「『マエストロ指揮者』ウェブスター中将にであえて光栄です」

お互い簡単な挨拶を済ませると、3人は直ちに地上車に乗り込み、

出撃準備のため、それぞれの職場に戻った。

厳しい訓練が終わった後である。休暇中の部下たちが帰ってくるまでにいささかの時間はかかるかと踏んでいたランベルツであったが、今回は嬉しい事に彼の部下もまた、閃光の異名に恥じない迅速さで出撃準備に間に合い、翌日の朝までにはすべての準備を終わらせてしまった。

時間のあいたランベルツは出撃時間までの休養を部下に命じるとともに、ナオを自分の執務室に呼んだ。

「お呼びですか。ランベルツ中将」

ランベルツの執務室に入ったナオは一時の上官に敬礼した。ランベルツは形だけ敬礼を返し、切り出した。

「我々はこれよりケルンに向けて出撃する。だが、卿は研修中の身の上だ。命令を拒否することもできるが、出撃についての卿の意思を尋ねたい」

ナオは身を震わせた。彼女にはもとより、「否」という選択肢はなかった。閃光ランベルツの戦いを間近で見る事が出来るのだ。行かない訳がない。

「出撃命令、謹んでお受けいたします。ランベルツ中将」

ナオは2秒と考える間もなく返事をした。

「さすがは剛腕リヒテンシュタインだな。よろしい。卿には旗艦フエンリルに乗艦してもらおう。もちろん、艦橋にだ」

ランベルツはナオの返事を確信していたかのように頷いて言った。
「剛腕」という言葉が少し引かかったナオだったが、すぐに気を取り直し、出撃準備のため、いったん自室へ戻った。新帝国歴20年6月26日。戦いへの序曲はこうしてはじまった。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第八話

出撃時間に近づいた宇宙港では兵士たちの家族、恋人たちでごった返していた。これから出撃である。中には帰ってこられないものもいるかもしれない。親しい人との永遠の別れにもなるかもしれない時間を誰もが皆惜しんでいた。

ランベルツのもとにも家族が集まっていた。

国務尚書ウォルフガング・ミッターマイヤー、養母エヴァンゼリン、そして妹のアンネ、弟のフェリックスであった。

「閃光の異名に恥じない戦いをしろ。お前は私達の誇りだ。必ず生きて帰ってこい」

ミッターマイヤーは愛する息子に言った。

「はい。父さん。フェリックス。俺がいない間、父さんや母さん、アンネを頼んだぞ」

「わかったよ。兄さんも御武運を」

「早く帰ってらっしゃいね。美味しいブイヨンフォンデュを作って待っているから」

「はい。母さん」

「お兄ちゃん。帰って来たら、私のザッハトルテも食べてね。アレク様にお渡しする前に味見してもらわなきゃ」

妹の無邪気な一言におもわず笑ってしまうランベルツだった。

「おいおい、俺は毒味役か？それにしても、話してるだけでもお腹いっぱいになりそうだ」

家族との歓談を楽しんでいると、ウェブスターが、妻のヘレーネとやって来た。

「歓談中水を差して悪いな。ランベルツ。お前さんのご家族にぜひとも挨拶したいと思ってな」

長くのびた黒髪を後ろで束ねた帝国屈指の知将が言った。

「何、いいさ。俺も卿の奥方に挨拶に行かねばと思っていたところだ」

そんな二人のやり取りを見ていたミッターマイヤーは昔のことを思い出していた。彼ら二人は、我々の若い頃に似ている。双壁の一翼はもういない。だが、その系譜は今も受け継がれている。ミッターマイヤーは父として、先達として彼ら二人を見守っていた。ミッターマイヤーはウェブスターに話しかけた。

「ウェブスター中将、息子を頼む。あれは真面目なやつだが、それ故に足下をすぐわれるときがある。助けてやってくれ」

「微力をつくさせていただきます。私もまたランベルツには助けてもらうことになるかもしれません」

ウェブスターは帝国の至宝とまで言われる英雄に話しかけられ、ら

しくなく興奮しているようであった。彼らの世代にとってはミッターマイヤーは神にも等しき存在であったのだ。

「ミッターマイヤー元帥。夫もランベルツ中将に出会えたことが生涯最高の喜びだと常々申しておりますわ」

ウェブスターの妻、セレーネも会話に入った。

「卿は良い奥方を持ったものだ。……そうだ、ハインリヒ。お前もそろそろ結婚したらどうだ。もう30を過ぎたんだ。好きな人がいないわけじゃないだろう。俺だってな……」

話の方向が予想だにしない方向へ、そして予想だにしないタイミングで振られたのでランベルツは、早々と戦術的撤退を決め込んだ。

「ウェブスター！ そろそろ出撃時間だ！ 早く準備をしなくては！」

ランベルツは僚友の肩をつかむと、閃光の名に恥じぬスピードで家族のもとを後にした。ウェブスターはしばしの別れとなる妻に笑顔で手を振って去った。

スロープでウェブスターはランベルツに言った。

「お前さんの言い分は聴いているからわかるが、親父さんの言う事ももつともだ。結婚したらどうなんだ。なんなら、いい女性を紹介するぞ」

真面目で剛胆な性格のランベルツだが、こと結婚に関しては非常に頑固だった。軍人であるかぎり、いつどこで死ぬかわからない。そ

んな自分がどうして女性を幸せに出来ようか。そして人殺しを生業にする軍人であるが故に、幸せになつてはならないという義務感が彼を縛り付けていたのだった。

「いや、まだその気にはなれんよ。相手もないことだし、だいいち俺のような男を好きになるような女性などいないさ」

ランベルツはいつものように親友の申し入れをことわった。そんな事はないと言おうとしたウェブスターだったが、副官のクララ・シユレーゲル大尉に呼び止められてしまった。

「司令官。艦隊出撃の準備が整いました。分艦隊の陣容表になります。作戦会議の日はいかがなさいますか」

「ありがとう大尉。作戦会議はここにいるランベルツ中将与スケジユールを合わせてなくてはならないからな。いつがいいランベルツ……」

そういった「指揮者」^{マエストロ}の異名をとった帝国きつての名提督はその時の自分の表情をついにわからなかったであろう。

親友であり、帝国軍最高の勇将であり、真面目に目鼻がついて歩いているような男が見た事もない表情を浮かべていた。ウェブスターの手記には次の文が記述されている。

「なんと表現をしたらいいのか。はにかみと赤面と足して2で割ったような。初めて憧れの女性を見た男の表情をしていた。私はその形容をどう表現したらいいかわからなかった。いや、自分自身がどんな表情を浮かべていたかわからなかったのである」

そんな僚友をよそに、ランベルツはクララに突飛としか言いようのない話題を切り出していた。

「や、やあ、シュレーゲル大尉。ッ今日はいい天気だな」

出撃を前になにを言い出すのか。クララは不愉快という文字を顔に貼付けた表情を浮かべた。

「ランベルツ中将。我々は今、出撃を控えているのですよ。そのような発言は不愉快です！ 私はこれにて失礼します」

そういうと、さっさと自らの乗艦に歩いていった。

「……やれやれ、あいつも真面目だからな。しかし、あれはお前さんが悪いぞ。少しはレディに対する言葉遣いをだな……まさかお前さん、シュレーゲル大尉の事が好きなのか」

親友に凶星をつかれて、帝国軍最高の勇将は顔を真っ赤にして、剛胆とはほど遠いちいさな声を絞り出した。

「……誰にも言うなよ」

そういつて小走りに自分の旗艦に向かったが、精神の動揺は計り知れなかったのだろう。何も無いところで転びそうになり、前にいたナオに抱え上げられていた。

「誰にも言うなよってお前……バレバレじゃないか……」

ウェブスターは僚友の遼遠なる前途を思い、立ち尽くしていた。数年後、クララとランベルツは華燭の典をあげる事になるが、それに

至るまでにウェブスターのなみなみならぬ努力と軍務省の尽力があったことは言うまでもない。

帝国歴20年6月26日、ランベルツ艦隊とウェブスター艦隊はケルン解放に向け出撃した。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第九話

出撃に前後して、皇帝アレクサンデル・ジークフリード・フォン・ローエングラムは交信可能な全てのチャンネルを用いて演説を行った。

「銀河帝国は銀河革命戦線正統政府なる政府の存在を一切認めぬ。海賊には騒乱罪と帝国反逆罪をもつて鎮圧するものである。ケルン市民には一両日中に自由と安全を回復させる事を、予は宣言するものである」

演説に際してのアレクサンデル・ジークフリードの目には優しさではなく、厳しさと静かな怒りの光がたゆたっていた。

そのことを知った、ジェイムズ・アーロンは愕然とした。

「なんと言ふ事だ。我々の国が、我々の存在が一切認められないとは……こうなったら、交戦しかない。戦って、我々の存在を認めさせるのだ。艦隊の状況はどうなっている」

アーロンはウィーデマンに尋ねた。

「艦船の整備は突貫作業で行っています。現在1万7千隻が稼働出来ず。一会戦分の武装も補給体制も万全です」

ウィーデマンは答えた。彼らは政府としての体制を整えると同時に、艦隊の整備を行っていた。その多数はトゥルナイゼン艦隊から捕獲したものであったが、十分に帝国軍と渡り合える数だけの数を確保していた。あとは、どの戦場で帝国軍を迎え撃ち、撃滅するかであ

った。

ケルンは攻めにくく守りやすい地の利をもつ惑星である。二つしかない回廊を塞いでしまえば艦隊で突入することは困難であった。

故にアーロンは回廊の地形を活用して防御戦を挑もうと考えたが、軍の責任をまかされたウィーデマンは反対した。回廊の防御のみに固執してしまうと数的回復力、兵力に劣る自軍が圧倒的に不利であったためである。

ウィーデマンはむしろ回廊自体をおとりとして、一会戦で決着を付ける事を主張した。最初は納得出来なかったアーロンであったが、ウィーデマンの作戦案を聞き了承した。

同時刻、帝国軍でも討伐軍総旗艦ボセイドンにて作戦会議が開かれていた。今回の作戦の総司令官のロバート・ウェブスター中将が口を開いた。

「我々には時間がない。一会戦にて敵を壊滅させなければ、市民に危害が及ぶ可能性がある。それは断じて避けなければならない」

ウェブスター艦隊副司令官のフィリップ・バーノン少将が言った。

「しかし、ケルンの地理的状況を見ると敵が回廊の地形を利用して防御戦を挑んでくる事が予想されます。そうなると厄介です。消耗戦になりはしませんか」

「大丈夫だ。そのために我々がいる。我が艦隊の機動力と火力を活かして敵の防御を突破する。回廊突破の後、我々は直ちに反転し、回廊の地形を逆用して敵を回廊に閉じ込めウェブスター艦隊と挟撃

して敵を討つ」

ランベルツが作戦案を述べた。僚友の言葉に頷きながら、ウェブスターは幕僚たちに言った。

「その通りだ、だから今回は先陣をランベルツ艦隊としてまず縦列陣をしき、短期決戦で回廊の防御線を突破し、敵艦隊を撃破する。異論はないか」

諸将が全員起立した。作戦の方針が決まったのだ。作戦の細部を確認しあい、作戦会議は終了した。

それぞれの思惑を胸に、戦いの準備が着々と進んでいく。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十話

ランベルツが自分の艦隊旗艦フェンリルに戻ると、真っ先にナオが艦橋で出迎えた。

「お帰りなさい、提督。現在ケルンまで約10日の距離まできます」

「ありがとう。副官業務をやらせてしまつてすまない」

ランベルツはナオに礼を言った。副官のシュタイナー少佐が急病のため出撃できず、ナオが副官の業務を臨時に引き受けたのだった。

「いえ、これも勉強になりますわ。それに副官の業務は慣れていきますから」

そういうと、ナオはひと呼吸おいて、かねてよりの疑問をランベルツにぶつける事にした。

「……ところで、提督。私の事を『剛腕』とおっしゃいましたが、どうしてなのですか？」

「ああ、俺の後輩にヴェルナー・テンシュテットという妙なやつがいてね。卿のことをそう呼んでいたよ。うちの副長は『敏腕』というより、『剛腕』だってね」

ランベルツは冗談めかしてナオに告げた。ナオは顔を真っ赤にする。と遠くはなれた僚友に怒りをあらわにした。

「ヴェルナー……よりによってなんて事を。帰ったらとつちめてやらなくちゃ」

指の関節をならして戦闘準備を始める臨時副官にランベルツは微笑んだ。

「卿らは仲が良いのだな。ヴェルナーも言っていたが、卿は明らかに変わったようだ。以前は死地を求めるような暗いまなざしをしていたが、今は違うようだ。ヴェルナーは砲撃と操艦の腕は一流だが、用兵の腕は未知数だ。卿の力で助けてやって欲しい。……できれば、それ以外の面もな」

ランベルツの頼みの真の意味を理解したナオは先ほどとは違う意味で赤面する事になった。

「いえ、そんな。ヴェルナーは……その、弟みたいなもので。その……困ります」

腕っ節の強く気丈な臨時副官の珍しい表情を見る事をランベルツは楽しんでいたが、オペレーターよりジャムシード星域到達の報告が入った。

ランベルツはナオにマイクを渡すよう言うと、艦隊の全員に向けて話し始めた。

「ランベルツ艦隊全将兵へ。本艦隊は今ジャムシード星域に到達した。本艦隊の目的はケルンの速やかな解放と海賊の殲滅である。彼らは手強い。決して油断するな。普段の訓練を思い出せば十分渡り合える。諸君の健闘を期待する」

新帝国歴20年7月4日、討伐艦隊はジャムシード星域に到達した。
海賊との戦いがいよいよ始まる。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十一話

新帝国歴20年7月14日、ロバート・ウェブスター中將を總司令官とする討伐艦隊は二つある回廊のうち、帝国側に近いケルン第一回廊手前約80万キロに布陣した。海賊艦隊は当初トウルナイゼン艦隊同様、質量兵器による攻撃を企図したが未遂に終わった。これは討伐艦隊が予想を遙かに上回る速度で進撃して来た事と、その警戒態勢に全く隙がなかったためである。

この海賊艦隊の予想を上回る進撃の早さは、ウェブスター艦隊もまた閃光の雷名には及ばないものの「疾風ウオルフ」並の快速をもつて進撃させる事が可能だったためである。ウェブスターのもつ器用さが彼が「指揮者」の異名をとる理由の一つである。

ジャムシード星域会戦またはケルン回廊の戦いと呼ばれる会戦に参加した兵力は、帝国側艦艇2万1,570隻、将兵215万8,759人、海賊側艦艇1万7,840隻、将兵120万7,000人であった。両軍はケルン第一回廊をはさんで対峙した。回廊には海賊艦隊を目視できないほど多数の機雷が敷設されていた。

午前10時30分、帝国軍の攻撃によってジャムシード星域会戦は始まった。

「ファイエル！」

幾万もの光の束が機雷にあたり、たちまちのうちに回廊は灼熱と衝撃の地獄と化した。爆破の衝撃が攻撃を加えたランベルツ艦隊に襲いかかって来た。

「こらえろ！ 艦の姿勢を安定させるんだ」

ランベルツは全艦の姿勢を保たせるよう、指令を出した。

爆発が治まり、両司令官が見たものはもぬけの殻になっていた回廊だった。

「馬鹿な。艦隊がない……？」

ウェブスターは首を傾げた。もしかしたら、回廊出口に艦隊など存在せず、我々をどこかで待ち構えていたとしたら……

ウェブスターの脳裏に不吉な考えがよぎった。その不吉が艦隊に姿を変えてやって来たのはそのわずか5秒後だった。

「左右から敵艦隊！」

オペレーターの悲鳴がポセイドンの艦橋に響き渡った。

午前10時45分、戦いは新たな局面を迎える。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十二話

海賊艦隊は縦列陣をしいた討伐艦隊に挟撃を仕掛けて来た。回廊の地形に合わせ、縦に長い陣形にした事が裏目に出てしまい、討伐艦隊は側面からの奇襲を受けてしまったのである。ウェブスターは直ちに艦隊陣形の再編を指示した。

「艦隊を二手に分ける。ロイシュナー、ドルニエはバーノンについて右翼へ、後のものは俺に続いて左翼だ。オペレーター、ランベルツ中将をだしてくれ」

オペレーターはランベルツにホットラインをつないだ。

「ランベルツ、敵が挟撃をしかけてきた。我々の艦隊が食い止めるが、もって3時間が限界だ。3時間でなんとかしてくれ」

僚友の頼みにランベルツは自信ありげに微笑んだ。

「ウェブスター。俺を誰だと思っているんだ。2時間だ。2時間で助けに行く。それまで待っていてくれ」

ウェブスターは微笑んだ。

「そうだな。待っているぞ」

ランベルツは敵艦隊発見の報を知ると直ちに全軍後退の命令を出し、ウェブスター艦隊が二手に分かれる動きに呼応して自軍の陣形を紡錘陣形に再編させた。そして、通常の艦隊ではあり得ない高速で移動を始めた。

「これが閃光ランベルツの移動……」

指揮シートのためなりで、ナオはその移動速度に圧倒されていた。

海賊側は全軍を二手に分けて攻撃していた。ウェブスターの指揮する左翼をウィーデマンが、バーノン指揮の右翼をケストナーが指揮を執り攻撃していた。彼らは用兵家として「非凡」な才能を持っていたが、今回のケストナーのそれは際立っていた。彼は全軍を三隊にわけ、先頭の一隊が全力攻撃すると、すぐに攻撃しつつ後退し、次の部隊が援護しながら前進し、第二の全力攻撃を加える。先頭にいた部隊が最後尾まで下がると、補給艦に弾薬、エネルギーの補給をさせる事を繰り返した。これにより、最前線の部隊が常に全力攻撃が出来るようになり、正面に相対していたバーノンの部隊に少なからず損害を与えていた。

「ちい……奴らめ、どんどん新手を繰り出してやがる。このままでは数で押されるな」

バーノンは舌打ちした。ケストナー8,000隻に比べ、バーノン部隊は約5,000隻、数では圧倒的に劣っていたため、完全に防戦一方になっていた。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十三話

敵第三波が攻撃を仕掛ける頃、ランベルツ艦隊が敵側面に回り込んだ。ナオは指揮シートに座るランベルツに話しかけた。

「敵の第三波の集結に乱れがあるようです。ここを狙って攻撃を仕掛けるのはいかがでしょうか」

ランベルツは頷いた。

「卿の言う通りだ。全艦、攻撃目標敵第三波集結点」

ランベルツはシートから立ち上がり、右手を高く掲げた。

「砲撃戦用意」

手を掲げて1、2秒だろうか。艦内は恐ろしく静かだった。ナオにはその時間が永遠のように思えた。

「ファイエル！」

ランベルツの右手が振り下ろされると、艦隊から無数のエネルギービームが目標に向かって放たれた。

ランベルツが閃光の異名をとる理由は二つある。一つは疾風ウォルフを遥かにしのぐ超高速の艦隊機動。そしてもう一つは艦隊による一点集中砲火攻撃である。ヤン・ウェンリーが得意とした戦術にランベルツがさらに磨きをかけたのだった。「光の槍」と後世言われることになるその攻撃は要塞主砲に匹敵すると言われ、今回もその

名の通りの威力を示した。この第一射で敵の第三陣、約2,000隻が壊滅してしまった。

「馬鹿な……こんな、馬鹿な事があっていいのか……」

第三波壊滅を間近で目撃したケストナーはあまりの事実には茫然自失した。わずか180秒ほどであったが、その180秒がこの戦いの勝敗を決定づけた。ランベルツ艦隊が超高速で突進して来たのだ。

「主砲、斉射三連！」

凄まじいエネルギーの濁流が海賊艦隊を飲み込み、粉碎し、原子の塵に還元した。最初の一撃からわずか3分後、ジークムント・ケストナーの旗艦ヨルビムも12本の中性子ビームの直撃を受け、一瞬のうちに爆散した。

旗艦を失った海賊たちは秩序を失い、潰走を始めた。その様子を見たナオは驚きと賞賛の入り交じった表情で独語した。

「凄い……」

2回の斉射と1回の突撃。たったこれだけでランベルツは敵を壊滅させた。勝敗が決したと判断したランベルツはバーノン少将と、自軍の後衛の分艦隊司令官、エドワルド・ジンガー大佐を呼び出した。

「海賊どもには悪いが逃がすわけにはいかない。卿らで掃討戦を行ってくれ。それから、ジンガー大佐。卿は艦隊司令官としては初仕事になるが、訓練通り油断せずやってくれ」

「は、全力を尽くします」

ジンガーは敬礼するとすぐに自分の艦隊の指揮に移った。

ジンガー大佐は旧帝国時代からの叩き上げの軍人で分艦隊参謀長をつとめてきた。前任の司令官が転任した事に伴い司令官に昇格したが、昇進と出撃の時期が重なってしまったため、今回は異例で大佐のまま分艦隊司令官を務めていた。

ジンガー率いる2,000隻はランベルツ本隊から離れると逃げようつとする海賊を受け流すように斜線陣をしき猛烈な火線を敵に浴びせかけた。

その老練な用兵は百戦錬磨のバーノンですら、口笛を鳴らして賞賛した。

「たいしたもんだ。あれは相当な狐だな。俺たちもあぐらをかいていられんぞ」

急追したバーノン艦隊が敵に追いつくと後方から海賊たちに向けて猛射を加えた。

午前11時30分海賊艦隊右翼部隊は全滅した。戦いは第二幕へ移っていく。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十四話

ランベルツ艦隊が右翼艦隊を撃破したその頃、左翼では戦線が膠着していた。

ウィーデマン率いる海賊艦隊左翼は約9,000隻、対するウェブスター艦隊は5,000隻と数の上ではウィーデマン艦隊が圧倒的に優勢だった。ウィーデマンは敵艦隊に倍する物量を活かして、ウェブスター艦隊を半包囲しようと凹形陣をしようとしたが、ウェブスター艦隊に阻まれた。

指揮官が冷静沈着であっても、部下まではそうはいかない。指揮者マエストロウェブスターは少ない兵力を有効活用し、ウィーデマン艦隊の中でも突出しかけた部隊を集中的に攻撃し、敵の出ばなをくじいた。

それからの一時間の戦闘はごく小規模な戦闘を繰り返した。ウィーデマン艦隊は、ウェブスター艦隊の隙を見つけ出そうとしたが付け入る隙がなく、対するウェブスター艦隊はわずかの隙を見つけては攻撃を仕掛けて来たのである。

いわば能動的な守勢に立っていたウェブスター艦隊が攻勢に転じようとしたのは、午前11時15分のことだった。

「守勢のままではいずれこちらが限界になって、敵につけ込まれるかもしれん。攻勢に転じるぞ」

ウェブスターは艦隊から1,000隻あまりを意図的に突出させた。冷静沈着なウィーデマンはウェブスターの意図を見抜き、動かずに長距離砲による射撃で応戦しようとしたが、元々小規模の海賊が連

合してなった混成艦隊である。陽動艦隊を殲滅しようと1、500隻あまりが我先に前進しはじめた。

「まずい。戻らせる！ 狙い撃ちにされるぞ！」

ウィーデマンは直ちにすべての回線を開いて、艦隊の突出を防ぐと同時に、既に突出した艦隊の救出に向かった。艦隊が突出するのを見るや、ウェブスターは口笛を吹いて喜んだ。

「今だ！ 前衛部隊は後退、左翼は前進し本隊の動きを遮断、右翼もそのまま前進。突出した艦隊を半包囲する」

ウェブスターの迅速で流麗な艦隊機動はまさに戦場音楽ともいえるべき芸術的な用兵だった。突出した敵艦隊はたちまちのうちに包囲され、ウィーデマン本隊が駆けつけた頃には壊滅してしまった。

ちょうどそのとき、ケストナー艦隊壊滅の報告が海賊、討伐艦隊の司令官に同時に伝えられた。

「まさか……あのケストナーが死んだ……」

ウィーデマンは驚いた。ウィーデマンは自軍が圧倒的な敗北を喫したことをこの瞬間に知らされたのだ。これ以上の戦闘はいたずらに損害を増やすばかりで、自軍には何の益もないものだった。直ちに戦場からの退却を指示したが、それはほぼ不可能なことであった。

ウェブスター艦隊が全面的な攻勢を開始したからである。

「閃光ランベルツがやってくれたぞ！ 全艦、最後の勝負だ。海賊どもを逃がすな！」

ウェブスター艦隊は陣形を変え、一気に攻勢をかけた。

「敵は寡兵だ。一戦して退却するぞ。主砲、斉射三連！」

ウィーデマンは突撃したウェブスター艦隊に猛攻撃を加えた。ウェブスター艦隊は射程外へ直ちに退却するとともに陣形を再編し、長距離砲の斉射を加えた。ウィーデマンはその射撃に舌打ちした。

「いまましい射撃だ。装甲の厚い艦を前線に出せ。装甲の薄い艦は後方に下がらせろ」

ウェブスターの執拗な攻撃にさらされつつも退却の準備を成し遂げたのは、彼の非凡の証明でもあった。その動きを見ていたウェブスターもまた舌打ちした。

「敵さんもやるものだ。あれだけ痛めつけても退却の準備を成功させるとは」

「我々の艦隊の数は敵の約半分です。有効な打撃を与えられずにいたと言えます」

副官のクララが言った。ウェブスターは頷いた。

「お前さんのいう通りだ。だが、戦いもそろそろ終幕だ。ランベルツがくる頃だからな」

午後12時40分、戦闘は最終局面を迎えた。

銀河の歴史が、また一つ紡ぎ上げられる……

第十五話

陣形の再編が終わったウィーデマンは直ちに撤退を開始した。艦隊の半分を失った今となつてはこれ以上の戦闘は無意味だった。戦力を温存するためにも早く撤退する必要があつた。

だが、帝国軍はその撤退を許さなかった。ウィーデマン艦隊が全艦の回頭を終える寸前、ランベルツ艦隊の光の槍がウィーデマン艦隊を艦隊を貫いた。要塞主砲にも匹敵する一撃が艦隊陣形に大穴を開けた。

「……チャンスだ。敵艦隊を半包囲する」

隙ができるやいなや、ウェブスターは直ちに凹形陣に陣形を変えて敵艦隊を包囲し始めた。

「こちらもだ。ウェブスター艦隊と呼応し、敵艦隊を包囲せよ。それからシュタインベルク少将に連絡。敵艦隊先頭部に攻撃を加え、撤退を阻止させるんだ」

ヴィルヘルム・フォン・シュタインベルク少将は勇猛果敢なランベルツ艦隊において随一の猛将として知られている。ランベルツは彼を先鋒としてよく用い、特に戦況を激変させるときに彼の艦隊を好んで投入した。

「全艦、奴らを逃がして返すな！」

ヴィルヘルムの命令は、命令というより感情の激発だった。海賊との戦闘で、実弟のヴィクター・フォン・シュタインベルク大佐を失

い、彼はその怒りを中性子ビームに変えて海賊たちに叩き付けた。
「火の玉ヴィルヘルム」と渾名される彼の攻撃は海賊艦隊の戦闘部隊のことごとくを宇宙の闇に葬っていった。

包囲された海賊は行き場を失い、打ち減らされていた。ウィーデマンは陣形の再編と逃亡しようとする部下を引き止めようとしたが無駄に終わった。逃亡した艦のほとんどが真っ先に撃沈されたからである。

「艦隊を密集させる。とにかく防御を固くするんだ」

焼け石に水。自分でもそんなことはわかっていた。だが、ウィーデマンは討伐艦隊に隙が出来るのを待つしかなかった。

次々と敵艦が撃沈されていくさまをナオはランベルツ艦隊旗艦フェンリルの艦橋で見ていた。抵抗もできず無惨に破壊されていく艦。爆発一つ一つに百を超える命が散っていく様。これは戦闘ではない。虐殺ではないか。ナオの心に漠然とした不安がよぎった。

そんなナオを察したのか、ランベルツは振り返らずに話した。

「これは戦争ではない……虐殺だ。卿はそう思うか」

図星をつかれナオははっとした。ランベルツはそんなナオに構わず話し続けた。

「我々は軍人だ。人殺しが仕事でも、好き好んで殺す訳ではない。……だが、強烈なショックがなければ、また彼らは息を吹き返すだろう。第二、第三のケルンが出るかもしれない。そうなれば、犠牲者は計り知れないものになる。ケルンの悲劇を繰り返してはならな

い。大規模な反乱をなくし、帝国に平和な日々をもたらすためにも、我々は今日、彼らを滅ぼさねばならないんだ……」

ランベルツは静かに語った。一度もナオのいる後ろを振り向こうとはしなかった。光の光芒をただ見つめていた。

午後1時、戦闘はついに終局に向かう……

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十六話

午後1時、戦局は終息へ向かっていた。ウィーデマン艦隊は艦隊のほぼ6割が失われ、生き残ったどの艦も無傷な艦はいなかった。ウィーデマン艦隊旗艦セラフィムもまた、多数の被弾を受けていた。

「第18砲塔大破、第53ブロック、通信途絶！」

爆発、怒号、悲鳴が艦橋を支配していた。極限状況の中、ウィーデマンはなおも冷静さを失わずに指揮を続けていた。

「艦の被害状況は動力炉に関わる部分だけで良い。全艦密集体形を解くな。防御を徹底させるのだ」

その状況を見ていたウェブスターは独語した。

「意外にしぶといな。なんと言う奴だ……あれは……まずい！」

味方の陣形に乱れが出たのをウェブスターは看破した。同時刻、ランベルツもその乱れを見抜いた。

「シユタインベルク、下がれ！……全艦前進！陣形の穴を塞ぐんだ！」

火の玉シユタインベルクが猪突しすぎ、ランベルツ艦隊の凹形陣に隙間を生じさせてしまった。チャンスの到来を、冷静沈着なウィーデマンは見逃さなかった。

「チャンスだ！全艦全速前進、主砲斉射！この包囲から抜け出

すぞ！」

ウィーデマン艦隊左翼は最後の力を振り絞り、陣形の薄い部分に火線を集中させた。シュタインベルクも自身の失策に気づき、持ち直そうとしたが手遅れだった。手負いの獣の獰猛さをはかりかねたか、逆に攻撃され、機先を制された。ウィーデマン艦隊残余1、500隻あまりが戦場離脱に成功した。

ランベルツはシュタインベルクに回線を開いた。

「シュタインベルク。……焦りすぎたな」

「申し訳ありません。熱くなりすぎました」

「まだ、戦いは終わってはいない。すぐに追撃する。陣形を再編し、後方からついてこい」

ランベルツ艦隊は直ちに陣形を組み直し、傷ついたウィーデマン艦隊を急追した。ウィーデマン艦隊を再び射程におさめようとしたその時、側方から何者かの攻撃を受けた。無人衛星からの攻撃であったが、ランベルツ艦隊はしばらくの間進撃速度を緩めなくてはならなくなった。再び艦隊が秩序を回復したときには、ウィーデマン艦隊を完全に見失ってしまった。

「くそ！ 俺としたことが。こんな浅知恵に引っかかるとは」

ランベルツは床を蹴り上げた。そのとき、ウェブスターから通信が入って来た。

「すまない、ウェブスター。俺のミスだ。卿の頑張りを無にしてし

まった」

義眼の知将は微笑んで言った。

「なに、お前さんに追えなかったのであれば他の誰にも無理だろう。気にするな。それよりもランベルツ。一刻も早くケルンに降りて政情を回復しなければならん」

午後2時30分、ジャムシード星域会戦またはケルン回廊の戦いは、銀河帝国軍の圧倒的勝利によって幕を閉じた。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十七話

ケルン第一回廊で海賊艦隊主力と、ウェブスター、ランベルツ両艦隊が激戦を繰り広げている頃、時を同じくしてエドワード・マディガン中将率いるバーラト自治政府治安維持軍約2,000隻、銀河帝国軍強襲降陸艦隊約500隻がケルンの旧同盟側出口であるケルン第二回廊に突入した。

「本当は、こんなの俺の役目じゃあないんだがなあ……」

マディガンは誰にも聞こえない声で独語した。

マディガンは本来は参謀型の人間であり、艦隊指揮は「どうにか水準」というレベルであった。今回の任務は艦隊戦よりも、降下後のケルンのケルンシティ制圧と治安回復が主な目的であり、その面ではマディガンほど適任者はいなかったのである。

マディガン率いる艦隊は、ケルン第二回廊を進撃していった。ケルン第二回廊は第一回廊に比べてやや入り組んでおり、1万隻単位での艦隊の進撃は不可能であった。

「前方に機雷原！」

オペレーターがマディガンに報告した。

「おいでなすったな。掃宙艦に機雷の除去をさせよ」

艦隊参謀などの幕僚職が長く続いたマディガンである。このような

作戦に対する洞察において、バート自治政府内で彼をしのぐものは片手ほどもいなかった。だが今回においては、洞察力の高さと戦闘の勝敗は必ずしも一致する訳ではなかった。

掃宙艦が機雷原にさしかかった頃、回廊に敷き詰められた機雷が一斉に爆発したのである。爆発の余波がマディガン艦隊を襲った。

「全艦、姿勢を安定させる！……くそ、なんてこった」

爆発による衝撃はわずかながら、艦隊の統制を狂わせ、陣形にひずみが生じた。マディガン艦隊の艦の姿勢が回復しないうちに、海賊側が攻撃を仕掛けて来た。

「数はどうなっている？」

マディガンはオペレーターに聞いた。2、500隻を数えているとはいえ、工作艦、補給艦、強襲揚陸艦が多くを占め、正規の艦隊の戦力にはほど遠いからであった。

「わかりません。爆風と磁場の影響からセンサーが一時的に使用不能になっています」

「闇雲に撃つわけにはいかんな。補給艦と工作艦、そして強襲揚陸艦は陣形の中へ。守りを固めるぞ」

ここで、一気呵成に攻め込んでいたならば、勝敗はあっさりついたかもしれない。海賊側にはもはや、300隻ほどしか戦える艦艇は残っていなかった。しかしマディガンにはそれを知る由もなく、自軍がもつとも犠牲が少なくなる策をとるしかなかった。だが、それは敵にとってほとんど唯一と言っていいほどの勝機を与えることに

なった。

あらかじめ回廊に配置されていた攻撃衛星が、マディガン艦隊を攻撃しはじめた。爆発の余波はまだ続いており、艦の姿勢が回復しないままであったため、効率的な射撃も出来ず、中には衝突する艦も出始めた。その混乱に乗じて、多数のワルキューレとスパルタニアンの混成部隊がマディガン艦隊に襲った。艦隊陣形が大きく崩れ、数において圧倒的優位に立っているはずのマディガン艦隊は窮地に陥った。

マディガン艦隊旗艦であるエピメテウスに10機のワルキューレが襲来した。

「左右、天頂方向から敵ワルキューレ！」

オペレーターが報告したが、最早回避も離脱も不可能だった。俺の悪運もこれまでか。マディガンは死を覚悟した。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十八話

そのとき、数十本の火線と多数のミサイルが敵機を包み込み粉碎した。

「なんだ？」

マディガンが火線の出所を見つめると、そこには1隻の戦艦と1隻の巡航艦があった。オペレーターが帝国戦艦から通信が入ったことを伝えてくるとマディガンは急いで回線を開かせた。

「帝国軍ジャムシード星域警備艦隊所属、戦艦サターン艦長ヴェルナー・テンシュテット大佐です。マディガン艦隊を援護いたします」

セラフィーナを迎えに来ていたヴェルナーが基地への帰投途中、偶然戦闘に遭遇したのだった。

「提督、私に策があります。少しばかり艦隊の指揮をお譲りいただけますでしょうか」

マディガンは難色を示さないでもなかったが、彼自身に策はなく、命の恩人となったヴェルナーに助けてもらったことにした。

「よろしく頼む。先ほどは命を助けていただいて感謝する」

「こちらこそありがとうございます。提督」

ヴェルナーはセラの助力を借りて、マディガン艦隊の戦術コンピュータに対空戦術パターンとそのための艦隊陣形のデータを入力させ

た。5分もたたないうちに、艦隊の陣形がまとまり、やや艦同士の間隔が広い陣形になった。陣形がまとまろうとする時、敵機が再度来襲した。

「ファイエル！」

ヴェルナーの号令で、数千本もの火線と数百基のミサイルが敵機に襲いかかった。一機あたり2ダースを超えるビームと1ダースのミサイルを浴び、敵編隊は逃げることも出来ずに火の玉になって全滅した。

「なんと言う攻撃だ……」

マディガンは後に対空戦術の芸術と言われるヴェルナー・サーカスを初めて目の当たりにした。一回の攻撃でヴェルナーは戦況を変えることに成功した。海賊たちの優位は敵であるバート自治政府艦隊が混乱状態にあることが前提であり、機動戦力であるワルキューレが全滅し、マディガン艦隊の秩序が回復された今、勝機は完全に失われてしまった。

「ファイヤー！」

そのことに気づいたマディガンは直ちに艦隊を前進させ、海賊艦隊を蹴散らした。もとより、実働戦力においては1対5以上の戦力差があるため勝敗はすぐに決した。

午後1時5分、マディガン艦隊はケルン第二回廊突破に成功した。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第十九話

午後1時30分、マディガン艦隊はケルン軌道上に到達すると直ちに降下作戦を開始した。マディガン艦隊に守られた帝国軍強襲揚陸艦隊は二手に分かれ降下を開始した。リヒャルト・アーベントロート大佐率いる第一装甲擲弾兵連隊は宇宙港へ、デイトリツヒ・ザンデルリング大佐率いる第二装甲擲弾兵連隊はケルンシティへそれぞれ降下した。

宇宙港にはまだ海賊たちが駐留していたが、主力は既に壊滅していたこともあり兵力はごくわずかだった。午後2時30分には宇宙港が完全に制圧された。

市街地もまた、守備兵力は少なく、午後2時45分頃には戦闘はほぼ終結に向かっていたが、銀河革命戦線正統政府中枢のあるケルンシティ放送局は頑強に抵抗を続けていた。

4個中隊が制圧に動員され、海賊との間で激しい銃撃戦が展開された。当初、武装に勝る帝国軍が優位かに思われたが、海賊側の抵抗を粉碎するにはいたらなかった。むしろ死兵と化した海賊たちにより、帝国軍制圧部隊は防戦一方となってしまった。ホルスト・シュラー少佐率いる第4中隊が海賊たちの攻勢を食い止めていたこと、市街地戦がいち早く集結し、担当していた部隊が合流出来たため、午後3時15分ケルンシティ放送局は帝国軍によって制圧された。

「ここが、執務室だ。心してかれ」

扉を蹴破ってシュラーが突入すると、そこには恐ろしいほど静かな空間が広がっていた。広い執務室に反響したのは、侵入者の音だ

けだった。この部屋の持ち主は既にこの世のものではなくなっていたからだ。

ジェイムズ・アロンはブラスターでこめかみを打ち抜き、既に絶命していた。ローエングラム王朝史上最も謎に満ちた男は謎のままその生涯を終えた。

新帝国歴20年7月14日、銀河革命戦線正統政府の歴史はその頭首の死によって幕を閉じた。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第二十話

銀河革命戦線正統政府がその短い歴史を終えた直後、エドワード・マディガンは直ちに自分の仕事に取りかかった。マディガンはケルン全域に治安の回復と、海賊たちが駆逐されたことを伝え、自軍の補給艦から市民の当面の生活に必要な物資を分配した。ケルンの内情回復には相当な時間が費やされるかに思われたが、杞憂に終わった。

それは皮肉なことに、軍事統制と言う統治システムではあったものの、銀河革命戦線正統政府が悪政を敷いていなかったためであった。彼らはきちんと自分たちの状況を管理、把握し、なおかつ公正に市民に物資を分配していたのである。

その手腕は優秀な軍官僚であるマディガンを驚嘆させた。ともあれ、マディガンはウェブスター、ランベルツ率いる討伐艦隊本隊が来るまでのわずかな時間に、自らの権限で出来る作業を全てやってのけた。

「ふう……これで、あとは帝国の事務官に引き継いで終わりだ。……」

執務室で、最後の残務整理を終えたマディガンは、かつてアーロンが使っていた引き出しから一部の書類を見つけた。

「これは……」

それは、アーロンが書き残した、ケルンの独立計画書であった。そこにはアーロンの描いていた銀河革命戦線正統政府の未来図が詳細に書かれていた。アーロンはケルンを中心としたジャムシード星域

全体を商業国家として発展させようとしていたのだった。かつて、豊富な資金力と外交折衝によって、帝国、同盟に影響を及ぼしたフェザーンのように。

午後5時、海賊艦隊主力を壊滅させた討伐艦隊がケルン宇宙港に到着した。マディガンはこの事実をウェブスター、ランベルツ両司令官に報告した。

「まさか、海賊の親玉がこんなことを考えていたとはな」

ウェブスターは驚きを隠せなかった。

「ケルン占領と独立は、自軍艦船の整備のためのお題目に過ぎんと思っていたが、なかなかどうして、たいした男だったようだな」

ランベルツも呻いた。海賊は戦略目標というものもなく、更には国家の長期的計画を考えられるほどの手腕も実力も持っていないと思っていたからであった。ランベルツは傍らの僚友に言った。

「ともあれ、これは陛下たちに報告せねばなるまい。急いでフェザーンに戻らねば」

「ああ、直ちに準備にとりかかるう」

傷ついた艦船の応急修理と戦力の再編成を行った後、彼ら二人がケルンをあとにしたのは、新帝国歴20年7月21日のことであった。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第二十一話

途中、惑星ウルヴァシーにて補給を行ったウェブスター、ランベルツ艦隊は翌、8月3日帝都フェザーンに到着した。宇宙港では国務尚書ウォルフガング・ミッターマイヤー、宇宙艦隊司令長官カール・エドワルド・バイエルライン元帥、軍務尚書エルネスト・メックリッガー元帥、統帥本部総長ナイトハルト・ミュラー元帥が討伐艦隊の帰還を出迎えた。

「よく帰って来たな。ハインリヒ。ウェブスター大将。卿もご苦労だった」

ミッターマイヤーが両雄ふたりにねぎらいの言葉をかけた。

「ありがとうございます。……昇進ですか」

ウェブスターは尋ねた。

「そのことは、陛下に拝謁してからになるがな。ウェブスター大将、ミッターマイヤー大将。卿らは武勲をたてたのだ。その資格は十分にある」

統帥本部総長のメックリッガーが言った。

そのまま6人は地上車に乗ると、銀河帝国皇帝、アレクサンデル・ジークフリード・フォン・ローエングラムの待つ皇宮へと向かった。

謁見の間ではビッテンフェルト、ヒルダ、そして政務顧問のカール・ブラツケ、オイゲン・リヒターなど、帝国の首脳たちが両雄を迎えた。

そして、玉座には銀河帝国2代皇帝、アレクサンデルの姿があった。

「ロバート・ウェブスター中将。ハインリッヒ・ランベルツ・ミッターマイヤー中将」

ただ名前を呼んだだけであるのに、アレクの言葉は周囲にさながら美しい音楽でも奏でたかのような優雅な響きと冷やかかな威圧感を与えた。あの決断からわずかひと月あまり、まだあどけなさの残っていた18歳の少年皇帝は、銀河を統べる唯一の存在としての風格を漂わせ始めていた。

「卿らを大将に任ずる。よく、海賊どもを退治して来てくれた」

「恐悦至極に存じます。マイン・カイザー」

ウェブスターはそういうと深く頭を垂れた。隣のランベルツもそれに倣った。20歳近くも年少であるはずなのに、帝国屈指の将帥である二人は背筋に冷たい感覚が走るのを感じた。

おそらく銀河でただ一人のものしか持ち得ないものを知らず知らずのうちにアレクは手に入れたのだろう。ローエングラム王朝帝室史によると、2世皇帝アレクサンデルの人となりについて、「深謀遠慮にして果断、そしてなにより温厚篤実の人物であつた」と記されている。また、後年刊行されたウォルフガング・ミッターマイヤーの手記によれば、「陛下は皇帝の顔とアレクサンデルの顔を使い分けていた。彼は何より、誰よりも皇帝たらんとされていた」とある。皇帝としてのアレク、優しい青年としてのアレク。その両面の葛藤と彼は終世戦い続けていたのかもしれない。

「卿らの大将昇進の祝いとして、予からこれを与える」

そういつて、アレクは立体映像を表示させた。

「これは……」

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第二十二話

「これは……」

ランベルツが絶句した。アレクが表示させたのは帝国軍総旗艦クリエムヒルトだったからである。

「ランベルツ大将。卿の新しい旗艦として、このクリエムヒルトを下賜するものとする」

帝国軍総旗艦にして、帝国軍の象徴である艦を下賜されることは最上の栄誉であった。これはその場にいる誰もが感じていたが、ランベルツの返答はむしろ意外なものであった。

「恐れながら陛下、謹んでご辞退申し上げたく存じます」

至尊の冠をいただく青年の金色の眉がわずかに動いた。周囲はざわつき始め、傍らにいるウェブスターもランベルツを見たが、ランベルツは構わず続けた。

「自分は才とぼしき身。そのような艦をいただくにはまだまだ力が及びませぬ。それに、この度の戦勝の一番の功はこのウェブスター大将にあります。何卒ご再考くださりますよう、お願い申し上げます」

「おい、何を言い出すんだ。陛下がお前にくださると言うのだ。どうしていただかんのだ。お前がいなかったら全滅していたのは俺たちだった。お前にこそあの艦をいただく資格があるのだ」

戦局全体を常に見渡す冷静さを持つウェブスターもこの時ばかりは、頭に血が上っていた。

「いや、卿がいただくべきなのだ。第一、卿がこのたびの総司令官ではないか……」

両者の言い争いが次第に激化しはじめていくのを見かねた國務尚書ミッターマイヤーが二人を一喝した。

「よさぬか、卿ら！ 陛下の御前である！」

「くくく……よい。ミッターマイヤー。卿の意思、よくわかった。だがランベルツ、予とて仮にも銀河帝国の皇帝だ。卿は予の顔に泥を塗るつもりか？」

アレクは低く笑った。まだ外見は少年だが、その覇気、威圧感はそのそれと比肩しうるものがあつた。有無を言わせぬ重圧に、ランベルツは畏怖を感じていた。

「勅命だ。ランベルツ。予の艦、クリエムヒルトを受け取れ。そして艦に相応しい提督となり、父を超え、予を支えよ」

ランベルツは深く一礼した。アレクはウェブスターに話しかけた。

「ウェブスター大将。卿はウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツ提督を知っているか」

知らないはずがない。ヤン艦隊の重鎮として、ゴールデンバウム王朝の名将として活躍した、ウェブスターが目標とする提督であつたからだ。

「はい。陛下」

短くウェブスターは答えた。アレクは立体映像を切り替えた。アレクとウェブスターの頭上に、みたこともない大きな艦の画像が表示された。

「ローエングラム帝国の新しい上級指揮官の旗艦として現在建造が進められているのがこの艦、グロス・アドミラルス級だ。この艦には旧同盟、帝国の技術が使われている。この一番艦、ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツを卿に与える。未だ古い時代の悪しき風習を引きずり、旧同盟出身者を差別するものもいると聞く。卿が新時代の架け橋になり、新帝国軍の礎を築け。ウェブスター大将」

「身に余るお言葉。ありがたく頂戴いたします。マイン・カイザー」
ウェブスターは恭しく一礼した。

アレクは頷くと父譲りの豪奢な金髪を振り返し、玉座をあとにした。

こののちウェブスターとランベルツはいくつかの戦闘を経験し、多大な武勲を得、のちに「グリフォンの双翼」の二つ名を持つようになる。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第二十三話

銀河の深淵、未だ未開拓の辺境星域に海賊たちがあつまる小惑星帯がある。「櫻の園」と呼ばれたこの小惑星帯は小惑星一つ一つが補給基地やドック、工場を有し、数万隻単位の補給、修理が可能であった。

「櫻の園」の中心部にある小惑星、「水晶宮」にウィーデマンはいた。

ウィーデマンは傷ついた身体を引きずりながら、「水晶宮」の主にひざまづいていた。

「それでは、卿は以後、予に忠誠を尽くすと言っただな」

「はい……マイン・カイザー」

ウィーデマンにカイザーと呼ばれたその主は、海賊にしては似つかわしくない豪華な玉座に腰掛けていた。主は低く威圧感のある声でウィーデマンに言った。

「よかるう。予は卿の用兵家としての才能を高く評価している。我らとともに篡奪者と戦おうぞ」

「御意……」

ウィーデマンはそれだけ言っつと静かに立ち上がり、闇に消えていった。カイザーを名乗る主に側近の一人が話しかけた。

「よろしいのですか。あやつは我々に対立していたアーロンの腹心。

いずれ我々を裏切るやも知れませぬぞ」

「くくく……奴にそのような器量はあるまい。それに奴の知謀も、奴の戦力も我々にとっては必要なものだ。奴は我々を利用するつもりだろうが、こちらも奴を利用してやろうではないか」

「はい」

「ローエングラムなどと言う虚飾の王朝など予が消してくれる。そして、銀河に唯一絶対のゴールデンバウム王朝を復活させるのだ」

低い声で、主は笑った。銀河の深淵で、どす黒い策謀が動き出していることを未だ誰も知る由もなかった。

銀河の歴史が、また一つ紡ぎ上げられる……

第二十四話

新帝国歴20年8月20日、研修を終えたナオはフェザーン宇宙港で大将に昇進したランベルツの見送りを受けていた。

「卿には世話になったな。任地でも卿の力を存分に発揮して欲しい。それから、卿の帰りを待っている世話のかかる後輩がいるのでな。この艦を用意した」

ナオたちの背後には、戦艦ベイオウルフがあった。ランベルツの養父、ミッターマイヤーの旗艦であり、先帝ラインハルトとともに銀河を駆け抜けた歴戦の艦であった。

「重ね重ねのご配慮、ありがとうございます。閣下」

ナオが敬礼をしようとしたとき、走ってくる人影が見えた。ランベルツもまたその人影を確認したとき、一瞬ではおが上気し、明らかに挙動不審になった。

ウェブスターの副官であるクララ・シュレーゲル大尉が見送りにやって来た。

息を切らしてやって来た彼女は、一生懸命話しかけようとしたランベルツを一瞥もせず通り過ぎ、ナオに握手をした。

「リヒテンシュタイン先輩。どうか、任地に戻ってもお元気で」

「手のかかる相棒のところに戻るわ。クララ。……いえ、シュレーゲル大尉。あなたも頑張って」

「はい。先輩」

ナオの研修期間の間、一番の親友であり、理解者となっていたのはクララであった。そのことを知っていたウェブスターは多忙を口実に彼女を自分の名代として、見送りに行かせたのだった。もっとも、他の意味もあつたのだが。

ランベルツが軍人としての顔を取り戻し、ナオに歩みでた。

「ナオ・リヒテンシュタイン中佐。ヴェルナーを頼む。そして、卿のさらなる武勲と活躍を祈っているぞ」

そういうと、ランベルツはナオに敬礼した。隣のクララもあわてて敬礼すると、ナオもまた彼らに対して返礼した。

「ありがとうございます。ナオ・リヒテンシュタイン、バーラト星域管区警備艦隊に赴任します」

新帝国歴20年8月21日14時、ナオを乗せた高速戦艦ベイオウルフはジャムシード星域へ向け離陸した。その姿をクララとランベルツは並んで見上げていた。

「大丈夫だろうか……彼らは……」

「リヒテンシュタイン先輩なら大丈夫ですわ。誰よりも強く、優しい方ですから。まだ会ったことのない相棒さんもそうだと思いますわ」

「そうだな……」

そう言い終わると、二人はお互いの存在に気づき、いつもの調子に戻った。ランベルツは耳まで真っ赤になり、クララは不快の二文字を顔に貼付けた表情になった。

「シ、シュレーゲル大尉！ その、あの、卿の艦隊司令部まで送らせてはくれないか」

「いえ、結構です。そとに地上車を待たせておりますので、これにて失礼します」

そういうと、クララはさつと踵を返し早足で帰っていった。ランベルツは呆然と立ち尽くしていた。ウェブスターはその様子を物陰からこっそり見守っていた。帝国屈指の知将は親友に向けて、一人寂しくつぶやいた。

「情けない……情けないぞ……ランベルツ」

クララとランベルツが結ばれる日はいつになるのか。それはまた、別の年代史によって語り継がれるであろう。

銀河の歴史がまた一つ紡ぎ上げられる……

第二十五話

バイオウルフがフェザーンを出港して、10日ほど過ぎた頃、前方に500隻ほどの艦隊が現れた。

「敵襲か？」

艦長のオリバー・シュナイダー中佐がオペレータに聞いた。だした。

「いえ、味方のビーコンを出しています」

「あれは……」

艦橋にいたナオは驚き、数瞬後、今まで誰にも見せたことのない穏やかな表情で微笑んだ。艦長のシュナイダー中佐もまた、いつものクールな女性士官の見たことのない表情に驚いたが、思考をすぐに切り替え、前方の艦隊に注意を向けた。艦隊の旗艦から通信が入ったのはその1分後だった。

「こちらは、バーラト星域管区警備艦隊第6戦隊司令官、ヴェルナー・テンシュテット大佐です。そちらに乗艦しているナオ・リヒテンシュタイン中佐の出迎えに参りました」

今回の一件で、ヴェルナーは昇進こそなかったものの、ともに戦ったマディガン中将の働きかけによって500隻の艦隊司令官になっていた。

ヴェルナーの旗艦「サターン」に移乗したナオは正式に着任の挨拶をした。

「バーラト星域管区警備艦隊第6戦隊参謀長、ナオ・リヒテンシュタイン中佐。ただいま着任しました」

「命令書を拝見した。お帰りなさい、リヒテンシュタイン中佐」

ヴェルナーは真面目に敬礼した後、静かに微笑んだ。艦長に昇進したブラウン中佐以下艦の皆もナオの帰還を優しく迎えた。

「ありがとうございます。皆……艦長、いえ、司令官折り入って二人きりでお話があります」

ナオは急に真面目な顔になって、ヴェルナーに切り出した。

「わかった。俺の部屋で聞こう」

ヴェルナーはナオの表情を察し、私室に通すことにした。

「……さて、ナオさん、話とは一体？ ……グフウ！！？」

私室に入り振り返った瞬間、ヴェルナーはみぞおちにナオの拳を食らい崩れ落ちた。

「ヴェルナー……あなた、ランベルツ閣下にとんでもないことを吹き込んでくれたわね……」

背後に怒気の炎を揺らめかせ、ナオは指の関節をならしながら仁王立ちしていた。

「……ナオさん……一体何のことだ？」

予想外のダメージにうずくまりながら、ヴェルナーはナオにたずねた。

「あら？ シラを切る気？ ……そうねえ、剛腕リヒテンシユタインとか、居酒屋つぶしのうわばみリヒテンシユタインとか？寝ぼけて艦橋にぬいぐるみ抱いて駆け込んで来たことも話したみたいね…」

「あ、……いや、その……」

話したことが事実だけにヴェルナーは何も言い出せなかった。

「ヴェルナー……覚悟はできてる？ 純情な乙女心を踏みにじった罰を受ける覚悟を……」

ナオは絶対零度の微笑をヴェルナーに向けた。

「そんな乱暴だから、いい年して行き遅れるんだ……」

ポソリとつぶやいたヴェルナーだったが、ナオはその一言を聞き逃さなかった。

「ヴェルナー！！」

サターン中にヴェルナーの悲鳴が響き渡った。

「全く……少しは静かにならんもんな。うちの艦隊は」

ヴェルナーの私室の外で艦長のブラウン中佐がため息をついた。

「しょうがないですよ。NO・1とNO・2がアレですからね」

飛行隊長のエーリツヒ・フォン・アデナウアー大尉がとなりで笑った。ヴェルナーの部屋の前では艦の主立った面々が肩を並べて、指令官と参謀長のやり取りを聞いていた。

平和を取り戻しつつある世界で、彼らは戦い続けるであろう。永遠ならざる平和を守るために。

それを記す年代史はまた、銀河の深淵で記されていくのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6584i/>

銀河英雄年代史外伝 新たなる双壁

2010年10月11日01時52分発行